The Waves のデザイン

Percival を中心として

中谷　紘子

はじめに

Virginia Woolf の小説 *The Waves* は、他の Woolf 作品と比べても、その小説造形は非常に特徴的である。各章の冒頭部分では、物語空間に登場する人物たちは排除され、物語の時間とは別の、暁から日没までの太陽の光と、光の当たる対象物を中心に風景が描かれている。この冒頭部分と分離された物語の本体には、6 人の人物がほぼ独白の形で自らの内面を語る。物語を掌握する語り手は存在しない。そして、この 6 人の独白主体以外に Percival という人物の存在がある。Percival はメインのキャラクター、Bernard, Neville, Louis, Jinny, Rhoda, Susan の 6 人の独白の中にだけ登場する。Percival 自身には声がなく、語られる存在であり、その意味で「不在」である。「不在」は他の Woolf 作品にも見られるが、*The Waves* の Percival だけが、他の作品とは異なり、始終自らの声を持たない。すなわち、Percival には小説空間の構造化のモチーフの役割が与えられており、より象徴的な存在となっている。そこで本論では Percival に注目してテクスト空間の構造と意味について考えてみたい。

1. 中心点と壁のイメージ

独白の声を持たない Percival は語られる存在であり、みなの中心に位置している。ヒーロー性を持ち、威厳があり、詩のミューズとして讃えられ、憧れの的として描かれる。折に触れ、6 人の主体が Percival に想いを巡らせる様子は、小説の構造上、Percival が重心、中心として存在していることを示す。重心、中心は、Neville による Percival と Louis の対比や Bernard による自己と Percival の対比などのように、6 人のそれぞれの自己/他者認識のための一つの基準点になっており、小説構造が可視化される一因である。これについては Chantal Lacourarie が、放射状の影響力、converging/diverging ray の構造だとわかりやすく表現している。Percival の基準点は非常にしっかりしており、揺らぎない英雄像に加え、“But without Percival there is no solidity”（89）のように solidity と表現されており固定的に捉えられているのである。

中心に置かれた不在の英雄 Percival には、しかし、また別の視覚的なイメージが与えられている。「壁」のイメージである。インドへ旅立つ Percival に対して、6 人の主体たちは壁で囲まれた内側に、Percival は外側に位置されている。Percival は壁そのものでもあり(*The Waves* 109)、Rhoda の声からは、Percival という壁の内側にいて安心感が得られていたことがわかる(*The Waves* 121)。壁のイメージは、Percival の死後、壁が取り払われたことによる恐怖感となってさらに鮮明に提示されている。

2. 共通の感覚と瞬間

Percival と 6 つの主体の構造にはもうひとつ、重要なものがある。6 つの主体があるひとつの共通する感覚を覚えるところである。

> Something is made. Yes, as we rise and fidget, a little nervously, we pray, holding in our hands this common feeling, ‘Do not move, do not let the swing door cut to pieces the thing that we have made, that globes itself here, among these lights, these peelings, this litter of bread crumbs and people passing. Do not move, do not go. Hold it for ever’ (*The Waves* 109)

上記は Percival がインドへ赴任する前、6 人が一堂に会して食事をしたあと、勘定を済ませて再び別れようとする直前の場面だが、このとき「何か」が「作られ」、それを 6 人が共通の感覚(common feeling)として持っている。Percival によって引き起こされたこの感情は愛とも表現され、異なるそれぞれの日常生活から「ここ」に 6 人が存在するという一体感である。それが globe という形で表象されている。

Percival によって作られた一体感を表す球体は、空間的に表象されているが、同時に瞬間という時間のイメージ、いわゆる「瞬間のヴィジョン」を形成している。永遠には続かないこの瞬間を空間的に globe という形で捉え、なんとかとどめておこう(“Hold it for ever”)としているのである。すべては Percival をきっかけに、発生しているのである。

3. Percival の死による新たなイメージ

固定的な中心点、それでいて外界との壁として存在し、共通の感覚 globe を作り出した Percival の死後、彼の存在はどのようにとらえられているだろうか。Percival の死亡によって、この中心点はなくなり、その場所は“empty”(116)となり、Bernard は「もうそこへは行かない」と言う。名実ともに Percival は不在となり、中心は空洞化している。死後にもう一度 6 人は再集合するのだが、この時 6 人には「今、ここにみなが集合している」という感覚があるものの、形あるものの崩壊のイメージ、煙のイメージが与えられている。「炎を燃え上がらせたあとには、なにも残っていない」のように、球体 globe という固定的形であったものが、燃えてなくなるとして、非常に流動的なものと結び付けられている。空間化された時間は、空間を放棄することになるとも言えよう。さらに言えば、小説の最終章では Bernard 一人の語り直しによってすべてが再生され、すべてが吸収されてしまう。小説は、構造をなくす、というそのことによって、形もなく、始まりも終わりもない新たなテーマを示す結果になっている。

4. 作品のデザイン

上記のように *The Waves* は、視覚的なイメージの構造によって語りかけてくる作品である。これは、Woolf が小説造形をいかにヴィジュアルな視点で捉えていたかの一つの例である言えるだろう。*Moments of Being* をはじめとするエッセイや批評で著者自身が言及しているように、Woolf は感じた印象を色で捉え、出来事は場面で空間的に記憶する傾向があった。「偉大な作家たちは偉大な色使いでもある」(Collected Essays pp.2 241)として、積極的に色の表現を自分の作品に用いてもいる。*The Waves* においても豊富な色使いと場面の創出は随所にみられ、風景描写である各章の冒頭部には特にその筆力が発揮されていることは言うまでもない。しかし、より造形的な視点で観察し、小説を「書く」ことと、絵を「描く」という二つの表現方法を組み合わせた表現手段を試し、何かを表現しようとしたとすれば、太陽の動きによる光の作用を picturesque に、しかも各章それぞれの冒頭には時間にしてわずかな一瞬だけを描くことで、小説空間に絵画的な一瞬の空間が取り込まれているといえる。さらに 9 章分、つまり 9 つの絵を連作のように描くことで、Jack Stewart が印象派画家の Claude Monet の連作を連想したように、時間の流れをも同時に体現している。さらに、ヴィジュアルな芸術の手法は、まるで太陽のように存在する Percival に注目すると、冒頭部だけではなく小説の全体造形にもみられることがわかる。独白部は、Percival の構造化によって、冒頭部とは別の空間的イメージを取り込んでいるのだ。登場人物の独白という形のない内面の言葉で作品が構成されているにもかかわらず、物語内の人物の関係性が視覚的にとらえられることで、そこには造形という空間が作り出され、立体感を持たせていると言える。さらに、タイトル *The Waves* からイメージされるものに対して、Percival を構造化させ、固定させることで、そのまわりに存在する 6 人の声の主体の揺れが対照的に表現できているのではないだろうか。独白の声なき不在の Percival は、視覚的構造化、つまり空間的に固定を表すために存在している。Percival の死後は、固定的構造は別の構造にとってかわられることにより、固定的構造と流動的なイメージを視覚的に表現しようとしているように思える。

このように *The Waves* の全体構造のなかでウルフは、小説という流れの中に空間を持ち込み、言葉によって視覚で捉えられる物理的なイメージを引き出し、時間と空間を自由に造形しているのである。そのデザインの中心に、「不在」の Percival が存在しているのだ。

参考文献

Lacourarie, Chantal. “Painting and Writing: A Symbiotic Relation in Virginia Woolf’s Works.” *Interdisciplinary Literature Studies*, Vol.3, No.2, Spring 2003, pp.66-81.

Stewart, Jack F. “Spatial Form and Color in *The Waves*.” *Twentieth Century Literature*, Vol.28, No.1, Spring 1982, pp.86-107.

Woolf, Virginia. *Moment of Being*. A Harvest Book, 1985.

---. *The Diary*. Vol. 3:1925-30. Ed. Anne Oliver Bell. Penguin Books, 1982.

---. *The Waves*. Penguin Books, 1992.